

語義変遷について
——シェクスピア英語を中心として——

On Change of Meaning
——with Special Reference to Shakespeare's English——

倉 田 達
Tatsu Kurata

Shakespeare 英語を読んでいると当時の英語が現在使用の英語との相違点がみられるがそれらの一つに当時使用された語彙の意味が現在のそれと異っている点があることである。本稿ではそれに該当する主要語彙を選び当時の意味の発生とその後の語義変化の様相を *O. E. D.* の資料を基礎に主として心理的面を中心に検討することにする。

I.

語義の歴史に於て Shakespeare 作品が新しい意味の初例となっている場合

mutual

Measure for Measure I. ii. 164 の our most *mutual* entertainment の *mutual* は 'intimate' の意味に使用されている。

O. E. D. で語義の概略を調べると

- ① reciprocal 1477—1894
- ② respective; belonging to each respectively 1548—1837
- ③ intimate *obs.* 1603 Shak. *Measure for Measure* I. ii. 164—1749

①②の如く歴史的には「相互的」意味が支配的であり Shakespeare の 'intimate' の意味使用はかなり後になってからであり新しい意味附与であるが使用期間が非常に短く一世紀半で消滅している。意味の移りは重点が外観的より内面的への推移を示している。

Smile

Smile you my speeches, as I were a fool?

—*King Lear* II. ii. 87

此の *smile* は *deride*, *laugh at* の意味で悪意に使われている。*O. E. D.* に依ると此の意味は Shakespeare の最初にして最後の用例になっている。同じ辞書で語義をみると長期 (1300—1898) に亘って to give to the features or face a look expressive of pleasure or amusement, or of amused disdain, scorn etc. の意味で使用されていたが上例の如く徹底した悪意に用いられたのは初めてであろう。其の他 to bring or convert into a specified condition by smiling として 1588—1728 の間に 4 例ありそのうち最初 3 例は Shakespeare

からの引用である。但し此の意味も約一世紀半の寿命である。此の新意味作成は重点が原因より結果に移った場合である。

語義の歴史の観点からすると別に悪意を含まない「笑う」意味が同心円的存在となりそれに感情的要素を加えたり、因果関係に依り重点を移したりして所謂周辺の意味を生じさせている。然し今日まで残った意味は同心円に相当する部分のみである。

society

Macb. Ourself will mingle with *society*

And play the humble host.

—*Macbeth* III. iv. 3-4

O. E. D. に依ると persons with whom one has, or may have, companionship or intercourse とあり上例が一番最初に掲げられている。

更に同辞書に依ると plural form として 1598 *Merry Wives of Windsor* III. iv. 8 の 1 例がある。

society という語は歴史新しく 1500 年代からの使用で始まり新しい意味に使用するのみならず Shakespeare は形式に於いても新しい形を使用している。

社会の発達に伴い今日の意味に進展したものと考えられる。

extravagant

(1) *Hol.* This is a gift that I have, simple, simple ;

a foolish *extravagant* spirit, full of forms, figures,

shapes, objects, ideas, apprehensions, motions, revolutions ;

—*Love's Labour's Lost* IV. ii. 67-9

(2) ; and at his warning,

Whether in sea or fire, in earth or air,

The *extravagant* and erring spirit hies

To his confine ;

—*Hamlet* I. i. 152-5

O. E. D. より初例年代順に概略すると

① roving beyond just limits or prescribed methods ; exceeding the bounds of reason or property ; excessive, irregular 1588 *L. L. L.* IV. ii 68—1868

(1) が初例に掲げられ exceeding the bounds of reason の意味に使用されている。

② that wanders out of bounds ; straying, roaming, vagrant *obs.* 1602 *Hamlet* I. i. 154—1841-4

(2) が初例となっていて「さまよう」意味の使用例となっている。

③ varying widely from what is usual or proper ; unusual, abnormal *obs.* 1650-1701

④ exceeding the bounds of economy or necessity in expenditure, mode of living etc. ; profuse, prodigal, wasteful 1711-1879

①と④のみが今日まで残っている。意味発生の過程は「一定の限界を越えた」意味の共通の枠を介して限界内容に応じて次から次へと意味の発生を促している。①は限界の内容が limit, method, reason, property であり「それらの限界を越えた」意味で結果として excessive, irregular の意味となる。③は限界内容が常道・常識であり④は economy, necessity in expenditure, mode of living etc. であり profuse, prodigal, wasteful の意味となる。

Shakespeare の新意味使用として①と②があるが②は約二世紀半の生命であるが①は今日

まで続いている珍しい例である。

history

(1) *Page*. It it a kind of *history*.

—*The Taming of the Shrew* Induction ii. 144 (1596)

(2) *Pol*. The best actors in the world, either for tragedy, comedy, *history*, pastoral, pastoral—comical, historical-pastoral, tragical-historical, tragical-comical-historical-pastoral, scene individable, or poem unlimited:

—*Hamlet* II. ii. 424-8

O. E. D. では元来は ‘tale’, ‘story’ の意味で 1390-1834 となっていて伝統的意味を形成し「歴史的」意味を帯びてくるのは 1480 年代に入ってからである。「物語」と「歴史」とは内容的類似性をもっていることに起因しているものと思われる。Shakespeare は伝統的意味の ‘tale’ ‘story’ からその一形式である ‘drama’ の意に初めて用いたり更に *history* が後に至って発生した意味である「歴史」の意義を帯びさせて ‘a historical play’ の意にも使用している。(1) は前者, (2) は後者の意味に用いられている。1596-1877 となっていて (1) (2) の他に Shakespeare 作品から 1, 2 引用されている。所謂意味の「縮小化」である。

II.

此の分類に入るのは Shakespeare の初例ではないが既に使われ始めた新意味に Shakespeare も進んで使用した場合である。

modern

; where violent sorrow seems

A *modern* ecstasy; —*Macbeth* IV. iii. 169-70

O. E. D. に依り初例の年代順に概略をみると

- ① being at this time, now existing 1500-1752 *obs.*
- ② of or pertaining to the present and recent times, as distinguishd from the remote past; 1585-1864
- ③ characteristic of the present and recent times; new-fashioned 1590-1898
- ④ everyday, ordinary, commonplace 1591-1600

上例の *modern* は④の *commonplace* の意に使われている。①②③共通の意味は「現在を含む一定時期」であり③は①②の共通の意味要素の上に更に他の時代と比べての「時代的特性」が加えられ④は①②③の共通要素が総括的であるのに対しそれを構成する部分に視点を移した場合であり *O. E. D.* では 4 例を掲げ Shakespeare 関係の 2 例を 2 番目と 3 番目に掲げているが此の意味は 10 年で廃れている。

lesson

My *lessons* make no music in three parts.

—*The Taming of the Shrew* III. i. 61

- ① a portion of Scripture or other sacred writing read at divine service 1225-1895
- ② a portion of a book or dictated matter, to be studied by the pupil for repe-

tition to the teacher 1225-1861

③ a continuous portion of teaching given to a pupil or class at one time 1290-1854

④ a public reading; lecture *obs.* 1340-1645

⑤ *Mus.* an exercise; a composition serving an educational purpose 1593-1754

①より②③④いと次第に教育的意味を帯びると共に意味の拡がりを示し⑤はその一部である音楽に限定した場合であり上例 (1596) は⑤に属する。但し⑤は約一世紀半の寿命である。

mystery

; you would pluck out the heart of my *mystery*;

—*Hamlet* III. ii. 389

語義を大別すると

① a religious truth known only from divine revelation 1382-1894

② non-theological uses: a hidden or secret thing; a matter unexplained or inexplicable; 13...-1892

③ a personal secret *obs.* 1529, 1602, 1604, 1617

①は宗教的②は①より広く一般的意味に用いられ③は②を構成する人間の最小単位としての「個人的秘密」に転用して上記の例 (1602) は此の意味である。全部で4例そのうち2例 (1602, 1604) が Shakespeare からの引用であり約90年の生命でしかない。

learn

Cal. You taught me language; and my profit on't

Is, I know how to curse: the red plague rid you,

For *learning* me your language!

—*Tempest* I. ii. 365 (1610)

上例の 'learn' は 'teach' の意味で今日では廃用化しているが *O. E. D.* に依ると 1200-1889 となっている。今日の 'acquire knowledge' の意味は 900-1874 となっていて歴史は後者の方が古い。前者の意味の発生は両者の実質的相関々係に依るものとみられる。

Ajax. Toadstool, *learn* me the proclamation.

—*Troilus & Cressida* II. i. 22

に於ける learn は 'teach' の意味より一般化した 'inform' の義に転用しているが同辞書では 1425-1697 約270年の生命であり6例中5番目に上例が引用されている。

'teach' は「教える側と教えられる側の上下の関係」が前提となっているが 'inform' となるとそういう格式張った両者の関係ではなく両方を同一の立場に置いて「第2人称の知らないことを伝える」という一般化した意に用いられている。

prize

I come by note, to give and to receive.

Like one of two contending in a *prize*,

That thinks he hath done well in people's eyes,

Hearing applause and universal shout,

Giddy in spirit,.....

—*Merchant of Venice* III. ii. 140-144 (1596)

此の prize は「競技」の意に使用され現存していない。*O. E. D.* では

a reward, trophy, or symbol of victory or superiority in any contest or competition 1300-1899 で此の意味は歴史最も古く今日まで続いている。此の伝統的意味は「contest や competition で優れた成績をあげた者に与えられる品物」の義で因果関係で結ばれた結果が語義を形成している。

従って伝統的語義は時間の流れに沿って原因より結果への方向を指しているが上例の prize は 'contest', 'match' の意味で時間の流れには無関係に逆に伝統的意味とは正反対に結果より原因へと重点が移り「競技」の義に Shakespeare は使用している。同辞書では使用期間 1577-1669 となっていて使用期間約 100 年足らずである。

III.

同一語彙の一義が新しい意味に他の一義が既に使われ始めた意味に使用された場合

starve

(1) *Æne.* Stand, ho! yet are we masters of the field.

Never go home; here *starve* we out the night.

—*Troilus & Cressida* v. x. 2 (1606)

(2) The air hath *starv'd* the roses in her cheeks

—*The Two Gentlemen of Verona* IV. iv. 161 (1591)

語義の概略を記すと

① die 1000-1657

② of, with hunger 1124-1735

③ for, of, with (grief, love, pestilence) 1330-1584

④ for, of, with (cold) 1380-1867

starve は最初広い意味で 'die' を意味していたが結果が原因と結び付いて語義を形成し次第に die of hunger, die of grief, die of cold と分岐し②と④が比較的あとまで残った。

(1) の 'starve out' は 'endure in perishing cold' と *O. E. D.* は説明する。此の語義形成は④に由来し④に於て原因が「寒さ」結果は「死」であるがその結果を形容詞、原因を名詞として特殊語義に句を使用していて Shakespeare の 1 例あるのみである。意味の上では Hendiadys の一種の変形である。

(2) は使役の意味に使い 1580-1607 で 30 年足らずで消滅している。

silly

; a *silly* time

To make prescription for a kingdom's worth.

—3 *Henry VI* III. iii. 93-4 (1593)

O. E. D. に依り語義の大略を記すと

① deserving of pity, compassion, or sympathy 1425-1894

② unlearned, ignorant *obs.* 1547-1795

③ weak, feeble,.....1567-1665

④ lacking in judgment or common sense; foolish,.....

⑤ helpless, defenceless *obs.* 1587-1665

⑥ scanty, meagre, poor *obs.* 1593-1767

①は「何かが欠けていることに対して起る人心の状態」で結果を示すが②③④⑤⑥は重点が結果より原因に移り「なんらかの欠如」が共通の枠となり「欠如」の内容に依り②は学問・学識の欠如③体力の欠如④判断力・常識の欠如⑤防御力の欠如⑥時間其の他の欠如等により語義の発生を促している。尚④は今日まで残っている。上例の silly は⑥の初例に掲げられ以下2例が続き約170年継続している。⑤の所属に *Two Gentlemen of Verona* から5例中2番目に引用されているが約80年で絶えている。

語義に因果関係のみられる場合、時の流れに沿って常に「原因→結果」の方向に進むとは限らないで逆に「結果→原因」の方向に語義が発生することもあることを示す1例であろう。

結 語

語義変化は一個の意味が消失して次に新しい意味が現れるというような明確な場合は寧ろ少く概して並行している場合が多い。

Shakespeare の語義使用では hot を angry, wrathful (1590 *Commedy of Errors* I. ii. 47) の意味に、又 idle を useless, of no value (1607 *Timon of Athens* IV. iii. 27) の意味に使ったり大分以前から使用され、尚、今日にその儘の語義を残しているものも少ない。

その反面既述の如く表現を豊にするのに既存の語義に新しい意味を附与し、初めて使用したり或は新しい意味に使用され始めた語義を Shakespeare 自身も進んで使用したり新意味使用に積極的態度を示している。このような場合、普通に用いられる型を大別すると①全体より部分に②外から内への対照関係③因果関係（一必らずしも原因より結果へと意味の変遷は常に時の流れに沿って動くとは限らず結果より原因への移り（動揺）もみられる）④一般化⑤共通の枠を通して内容に依り多義化、類似等がある。意味発生型の型とその意味継続期間の関係は一般的方法に依る発生は比較的生命が長く「全体と部分」に依る発生の場合は短いこともある。殊に特殊意味構成の starve out は遂に他の使用例もなく終っている。それは referent が定着するには社会に於ける数多い反覆が要求されるのであるが特殊な型のとき、それが不十分で referent を一般社会に於て喚起し得ない故に期間は短くなる傾向になるものと思われる。

Shakespeare は伝統的語義を使用するとともに表現を豊にするのに既存の語義から新しい意味を作成使用に積極的で英語への貢献がみられる。

簡言すれば新意味の発生や語義の推移は一般的原理として心理的面からは既存の語義を中心とした連合関係に依り発生・変化可能性の方向を示しているように思われる。

参 考 文 献

- H. Bradley: *The Making of English*
- E. W. Fellows: 'Propaganda:' History of a Word (*American Speech* October, 1959)
- G. Stern: *Meaning and Change of Meaning*
- E. H. Sturtevant: *Linguistic Change*
- S. Ullmann: *Words & Their Use*
- S. Ullmann: *The Principles of Semantics*
- S. Ullmann: *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*
- 辞書: *Oxford English Dictionary*